

「ここ、監視カメラがついているから。あと、さっき出てった人たちで、全員じゃないか

「あ？」

「そういう映像は、後で消してもらうように頼んでおくけど。君のあんな様子を、他の誰かに見られたくないね。だから、ここから先は、帰ってからで」

「言葉にならないう声をあげる、知恵蔵の耳元に口を寄せて、

「そんな、死にそうな顔、しなくとも……我を忘れるほど、心配してくれたんだよね。

ほんと、ありがとう」



瀕死の探偵 鳴原あきら

「満潮音。起きてるか」

門馬知恵蔵は一瞬、眩しさに目を細めた。

隅から隅まで純白の病室。横になっっている満潮音純の寝間着までもだ。

「意識はあるよ。話もできる」

「意味は超越した美貌が、今日はいささかやつれている。額にかかった淡いるの髪も乱れれていて、知恵蔵は一瞬、手を伸ばしかけたが、

「痛みは？」

「もう、あんまり。麻痺が残らなきゃ、近いうちに退院できるって」

「そうか」

知恵蔵はベッド脇に椅子を引き寄せて座った。声も低く、

「興奮所の方は当分、閉めておくことにした。落ち着かないし、仕事にならない」

「それでいいよ。この状態じゃ僕が何も出来ないし、変なのに押しかけられても困るし」

「この病室にくるのも大変だった。ポテイチェツクもされたし」

「完全看護、部外者立ち入り禁止だからね」

「現役大臣の一人息子なのに、見舞いの花のひとつ、ないんだな」

「あるわけないだろ」

「そうだな。花を使つて人を襲う連中がいるんだから」

先日、母の墓参りに行った満潮音は、同じ墓地にいた男から突然、花束を投げつけられた。男は警護の人間に取り押さええられたが、満潮音は手にかすかな痛みを感じた。次の瞬間、敷石に落ちたクモを見つけ、即座に踏みつぶした。ハンカチでざっとすくいとすると、他のにも似たようなクモがいなか、確認してくるくは、黒い足長の姿から、テロリストで、僕以外の人間にも危険が及ぶようなことを「彼を囁んだのは、黒い足長の姿から『悪魔の足』とあだ名されるゴケクモの一種で、日本にいない種類のものだった。花束に忍び込ませていたものらしい。すぐ血清を使用すれば死ぬことはないが、気づかなければ数時間後、痛みと痺れに襲われ、呼吸困難に陥る。囁まれた場所が壊死することもある。

「知……門馬くんは、僕が襲われたことを伝えてくれ。彼にも何かあるといけないから、事務所から一歩も出ないようにってね。落ち着いたら連絡する、こちらの心配はしないのでくれって」

手当てが早かつたため、臓器へのダメージは最低限ですんだが、身動きできないほど

の痛みには襲われ、満潮音は数日、面会謝絶状態となった。

「そして今日、ようやく知恵蔵は面会をゆるされた訳だが、

「おまえを襲った犯人、カルト系保守のシンパらしいが、言ってる動機が支離滅裂だそうだ」

「あの雑な実行犯はそうだろうね。一種の洗脳状態で、自分が何をしたらかわかってないのき。けど、特殊なクモを手でできるバツクがついているんだから、当分は用心しなきゃね。何が目的なのか、誰に対する威嚇なのかも、まだわからないし。今、そんな変な依頼は受けてないはずだし」

ないんだらうって思うんだ。若い頃の感傷じゃなくて、今も、ね」

「おい」

「でも、ぶつと顔に吹まれそうになると、君の顔が思い浮かぶ。何の得にもならないのに、血まみれで待っていてくれる人が、僕にはいるんだって」

「満潮音」

「君、目が赤いし、腫れぼったいけど、もしかして、僕が心配で泣いてた？」

「え」

「ごめんよ、ほんとに。僕の方は、熱に浮かされてる間、君に触りたい、君の蜜を味わいたいつて、いやらしいことばっかり考えてたのに」

「それだけ身身体が辛かつたんだらう」

知恵蔵は満潮音の髪をかきあげ、額に掌をあてた。

「私だつて、触れたかつた」

「ああ。痛いかな」

「うん。気持ちいい。君の掌のあたたかさが丁度よくて、よく眠れそうだ」

「そうか」

知恵蔵は手をずらし、満潮音のまぶたを閉じさせた。

満潮音はため息をついた。

「生きててよかった……見舞いの花束より、君の方が、ずっといい」

満潮音が息をたてはじめると、知恵蔵はそつと病室を抜け出した。

《何だ、この種類認識は？》

確かにクモ毒は、重篤な障害を引き起こす可能性があるが、死に至ることはまれだ。そもそも、花束を投げつけるというのも変な話だ。クモに衝撃を与えて攻撃させるためか。それにしても「私もお墓参りをさせてください」とそつと近づくべきではないのか。明らかにところを好まない種類のクモらしいから、いつも白装束の満潮音に対して、軽くぶつけるだけでも囁んだ可能性は高い。雑な実行犯、と満潮音は言つたが、彼の父親に対して、たいした威嚇になるとも思えない。殺人事件に発展すれば、話は別だろうが……

物思いにふけっていると、トレイに注射器をのせた看護師とすれ違った。

《待てよ。ゴケクモの抗毒薬にはウマ由米の血清を使うから、血清の追加時にアナフィキラクションヨツクを起こす可能性があるとか……間違つて静脈注射されると、死ぬ可能性も……いや、悪意ある人間なら、それを装つて別の何かを注射することだつて、ありえる》

反射的に身を翻すと、怪しい看護師は満潮音の病室に入つていくところだった。

「満潮音言！ー！」

思わず声を上げて飛び込んだ瞬間、知恵蔵は我が目を疑つた。

「皆さんは……どこから？」

偽看護師はすでに、数名の白衣の男に取り押さえられていた。布をかまされ後ろ手に縛られており、持っていた注射器も回収されている。満潮音はベッドの上で身を起こし、鋭い声で、

「本当に雑な実行犯だ。何か吐くとも思えないが、ここで自害させるなよ。念のため、爆発物も所持してないか、すぐに調べてくれ」

「ハッ」

医者の扮装のボデイーガード達がザツと足並み揃えて出ていくのを、知恵蔵は茫然と眺めていた。

「驚かせてごめんよ。何かあると困るから、クローゼットの中で見はつてもらつたんだ。でも、このタイミングで来るとは思わなくてさ」

「じゃあ、私とおまえの話も」

「ぜんぶ筒抜け。いや、君、そんなに恥ずかしいこと言つてなかつたよ。たぶんセーフ」

「おーまーえーはー！ー！」

「でも、さすがだね。看護師とすれ違つただけで危険に気づいたつてことは、僕の留守中に、悪魔の足について調べたつてことだろう。医者じゃないけど、君は立派なワトスンだ」

「クモに囁まれたつていうのも、嘘じゃないだろうな」

「それは仮病じゃないよ。まだ、よく動けない」

「本当だな？」

知恵蔵は満潮音に近づき、その頬を掌で包んで引き寄せた。

二人の顔ははしばらく重なつていたが、満潮音はされるまま、まったく抵抗しなかつた。「……本々、なんだな」

自分から口唇を奪つたのに、腫を潤ませているのは知恵蔵の方だった。

「だから、本々だつて言つたのに」

満潮音はうすく種類を染めて、

「君がこんなな種類のなの、初めてだから、すごく、嬉しいんだけどさ」

「ん？」

「いや、どういいう意味でもだめだよ。僕が困る」

「私だつて、突然おまえに死なれたら」

「困らないよう、各所の手配はしてあるよ」

「いや、まだまだ、おまえの墓参りをする準備ができてない」

「……にかい」

「願にまつてる」

「そつか」

満潮音は目をあげ、天井を見つめた。

「時々、自分は何で生きてるんだらう、誰のためにもならないのに、なんで死んじゃわ

向いていけない」

「いくらおまえの助手でも、私はただの幼なじみ、一般人だからな。テロの犠牲になつたところで、いい意味でも悪い意味でも、影響がなさすぎるんだらう」

「いや、おまえが、ここにしよう」

「じゃあ、おまえが、おまえの墓まで、ここにしよう」

「そうしてくれると嬉しい」

満潮音は目を閉じた。

「なんにしても、君が無事で良かったよ。もし君にまで害が及んでたら、あちこちに顔

「うん。でも入院なんて初めてだから、痛みがひいてきたら退屈で仕方なくてね。でも、何を讀んでも面白くないから、ぜんぶ片づけてもらった」

「具合がよくないからだ。無理をしないで寝ている」

「ああ、あの程度のものも避けきれないなんて、僕も年をとつたよ。砂利に足をとられたいわけでもない。雨で滑つたわけでもないのに。探偵もそろそろ廃業時かな」

「あ、あ、あ、あの程度のものも避けきれないなんて、僕も年をとつたよ。砂利に足をとられたいわけでもない。雨で滑つたわけでもないのに。探偵もそろそろ廃業時かな」

「あ、あ、あ、あの程度のものも避けきれないなんて、僕も年をとつたよ。砂利に足をとられたいわけでもない。雨で滑つたわけでもないのに。探偵もそろそろ廃業時かな」

「あ、あ、あ、あの程度のものも避けきれないなんて、僕も年をとつたよ。砂利に足をとられたいわけでもない。雨で滑つたわけでもないのに。探偵もそろそろ廃業時かな」

「あ、あ、あ、あの程度のものも避けきれないなんて、僕も年をとつたよ。砂利に足をとられたいわけでもない。雨で滑つたわけでもないのに。探偵もそろそろ廃業時かな」

「あ、あ、あ、あの程度のものも避けきれないなんて、僕も年をとつたよ。砂利に足をとられたいわけでもない。雨で滑つたわけでもないのに。探偵もそろそろ廃業時かな」

「あ、あ、あ、あの程度のものも避けきれないなんて、僕も年をとつたよ。砂利に足をとられたいわけでもない。雨で滑つたわけでもないのに。探偵もそろそろ廃業時かな」

「あ、あ、あ、あの程度のものも避けきれないなんて、僕も年をとつたよ。砂利に足をとられたいわけでもない。雨で滑つたわけでもないのに。探偵もそろそろ廃業時かな」

「あ、あ、あ、あの程度のものも避けきれないなんて、僕も年をとつたよ。砂利に足をとられたいわけでもない。雨で滑つたわけでもないのに。探偵もそろそろ廃業時かな」

「あ、あ、あ、あの程度のものも避けきれないなんて、僕も年をとつたよ。砂利に足をとられたいわけでもない。雨で滑つたわけでもないのに。探偵もそろそろ廃業時かな」

「あ、あ、あ、あの程度のものも避けきれないなんて、僕も年をとつたよ。砂利に足をとられたいわけでもない。雨で滑つたわけでもないのに。探偵もそろそろ廃業時かな」

「あ、あ、あ、あの程度のものも避けきれないなんて、僕も年をとつたよ。砂利に足をとられたいわけでもない。雨で滑つたわけでもないのに。探偵もそろそろ廃業時かな」

「あ、あ、あ、あの程度のものも避けきれないなんて、僕も年をとつたよ。砂利に足をとられたいわけでもない。雨で滑つたわけでもないのに。探偵もそろそろ廃業時かな」

「あ、あ、あ、あの程度のものも避けきれないなんて、僕も年をとつたよ。砂利に足をとられたいわけでもない。雨で滑つたわけでもないのに。探偵もそろそろ廃業時かな」

「あ、あ、あ、あの程度のものも避けきれないなんて、僕も年をとつたよ。砂利に足をとられたいわけでもない。雨で滑つたわけでもないのに。探偵もそろそろ廃業時かな」

「あ、あ、あ、あの程度のものも避けきれないなんて、僕も年をとつたよ。砂利に足をとられたいわけでもない。雨で滑つたわけでもないのに。探偵もそろそろ廃業時かな」

「あ、あ、あ、あの程度のものも避けきれないなんて、僕も年をとつたよ。砂利に足をとられたいわけでもない。雨で滑つたわけでもないのに。探偵もそろそろ廃業時かな」

「あ、あ、あ、あの程度のものも避けきれないなんて、僕も年をとつたよ。砂利に足をとられたいわけでもない。雨で滑つたわけでもないのに。探偵もそろそろ廃業時かな」

「あ、あ、あ、あの程度のものも避けきれないなんて、僕も年をとつたよ。砂利に足をとられたいわけでもない。雨で滑つたわけでもないのに。探偵もそろそろ廃業時かな」

「あ、あ、あ、あの程度のものも避けきれないなんて、僕も年をとつたよ。砂利に足をとられたいわけでもない。雨で滑つたわけでもないのに。探偵もそろそろ廃業時かな」

「あ、あ、あ、あの程度のものも避けきれないなんて、僕も年をとつたよ。砂利に足をとられたいわけでもない。雨で滑つたわけでもないのに。探偵もそろそろ廃業時かな」

「あ、あ、あ、あの程度のものも避けきれないなんて、僕も年をとつたよ。砂利に足をとられたいわけでもない。雨で滑つたわけでもないのに。探偵もそろそろ廃業時かな」

「あ、あ、あ、あの程度のものも避けきれないなんて、僕も年をとつたよ。砂利に足をとられたいわけでもない。雨で滑つたわけでもないのに。探偵もそろそろ廃業時かな」

「あ、あ、あ、あの程度のものも避けきれないなんて、僕も年をとつたよ。砂利に足をとられたいわけでもない。雨で滑つたわけでもないのに。探偵もそろそろ廃業時かな」

「あ、あ、あ、あの程度のものも避けきれないなんて、僕も年をとつたよ。砂利に足をとられたいわけでもない。雨で滑つたわけでもないのに。探偵もそろそろ廃業時かな」

「あ、あ、あ、あの程度のものも避けきれないなんて、僕も年をとつたよ。砂利に足をとられたいわけでもない。雨で滑つたわけでもないのに。探偵もそろそろ廃業時かな」

「あ、あ、あ、あの程度のものも避けきれないなんて、僕も年をとつたよ。砂利に足をとられたいわけでもない。雨で滑つたわけでもないのに。探偵もそろそろ廃業時かな」